

宝くじ おもしろ話

混乱の時代を映す 2つの宝くじ 「第1回勝札」と「特2宝籤」

政府は「宝くじ」の前身である「勝札（かちふだ）」の「第1回」を、戦費調達とインフレ抑止を目的に昭和20年7月16日に発売。だが、発売最終日の8月15日に奇しくも終戦。抽せんは予定どおり同月25日に長野県長野市で行われ、当せん金も支払われた。だが「勝札」はこれ1回きりで発売を終了。券面に残る「第1回勝札」の「第1回」の文字に歴史を感じる。

それから2カ月後、政府は戦災復興とインフレ抑止を目的に、新たに名称を「宝籤（くじ）」

として、昭和20年10月29日に「第1回」を発売した。第2回を同年12月28日に発売。3回目は昭和21年4月に発売されたが、券面に「第3回宝籤」の文字はなく「特宝2」とあるだけだ。

なぜか。「第2回宝籤」の当初発売予定額は2億円だった。だが、発売の間に1億円で減額。このため、余った宝くじ券に「特」の一字を加え「特宝2」とし、さらに宝くじ券の周囲に模様などを加えて再度印刷。これを「第3回」にかわる宝くじとして発売した。分類上は「特2宝籤」だが、別名「加刷くじ」といわれる。従って、歴史上、21年の政府発売「第3回宝籤」はない。なお「第4回」は同年5月25日に発売された。



ご当地クーちゃん
恐竜クーちゃん

当せん者エピソード

宝くじ こぼれ話

「当たってうれしい」よりも 「安堵の気持ち」の当せん者

宝くじの当せん番号調べをインターネットでするとい人は多い。そうした「インターネット派」の2人の当せん者エピソードをお届けしよう。

「よかったア！」福岡県の会社員Tさん（56）はテレビで年末ジャンボ宝くじのコマーシャルを見ていて、半年前に買った30枚のサマージャンボ宝くじ（第645回全国自治宝くじ）のことを思い出した。そして、神棚に供えてあった宝くじを手元に、インターネットで番号調べ。そうしたら、1枚が3等100万

円に当せん。瞬間、喜びとともに「気づいてよかった！」という反省の気持ちに襲われたそう。

期限ギリギリ 兵庫県の主婦I子さん（71）は長年の宝くじファン。このI子さん、暮れに人と会うため大阪駅前へ出かけたさい、発売中の年末ジャンボ宝くじ（第633回全国自治宝くじ）を30枚購入。そして、ドレスのポケットに入れたが、そのまま忘れてしまった。それから1年。同じドレスを着たさいに宝くじを発見。さっそくインターネットで調べたら、1枚が3等100万円に当せん。

これには驚いたが、支払期限が「あと10日間」と知って、もっとびっくり。翌日、換金して当せん金を無事、手にしたI子さん。「なんですか、安堵の気持ちの方が強いですね」と語っていた。



ご当地クーちゃん
信楽焼たぬきクーちゃん

当せん者エピソード

宝くじ こぼれ話

3人そろって「へびのお蔭で…」 「夢・抜けがら・生きてへび」

「へび」や「へびの夢」を縁起が良いという人は多い。ここに紹介する3人の当せん者も「へびのおかげで当せんした」と思っている。

黄金のへび 東京都の主婦M子さん（49）は、「黄金のへびの夢を見た」そうだ。「よし！」と思い、その日の午前中になじみの店に行き、第2213回東京都宝くじを50枚購入。抽せんの結果は1枚が1等の2,000万円に当せん。支払い開始日とともに換金したMさんは「帰宅したら、現金を抱きしめます」と語っていた。

抜けがら 茨城県の公務員Kさん（38）は

外出中に見かけた売り場で第2328回関東・中部・東北自治宝くじを10枚購入。その後、道を歩いていてへびの抜けがらを発見。ひろい集めて持ち帰り、その後、きれいにたたんで、宝くじと一緒に財布に保管。抽せんお結果は、1枚が1等の100万円に当せん。「これは絶対に抜けがらのおかげ」と信じているKさんだ。

白へびに触った 東京都の主婦S子さん（78）は沖縄旅行に出かけたさい、観光施設で白へびにさわらせてもらったそう。これは、絶対に縁起がいい」と自信を持ったS子さん。観光途中で国際通りの売り場で発売中の年末ジャンボ宝くじ（第633回全国自治宝くじ）を20枚購入した。抽せんの結果は1枚が3等の100万円に当せん。満面笑顔で換金手続きのS子さんだった。



ご当地クーちゃん
龍馬クーちゃん